

平成七年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第十五冊

目次

一、「沿革誌」より	1
二、事業概要	2
三、資料の収集・保管	3
四、展示	55
五、調査研究	58
六、情報提供	60
七、教育普及	61
八、庶務報告	77
九、文化財保護	78

蟹江町歴史民俗資料館

特別展示



彩色陶製狛犬（町指定有形民俗文化財）

須成神社の宝物展

期日：平成6年1月14日（金）～2月13日（日）午後1時まで

場所：蟹江町歴史民俗資料館 1階 展示室

主催：蟹江町教育委員会 / 蟹江町歴史民俗資料館

協力：須成文化財保護委員会 / 富吉建速神社・八知社



文化財保護シンボルマーク

文化財を守ろう。

1月26日は文化財防火デーです。

○特別展開催にあたり

蠶江町の最北部に位置する須成地区は、古くから須成神社（富吉建速神社・八咫社）と龍照院を中心とした門前町として栄えた地区である。

また、両社寺の厚い信仰のもとで執り行われる須成祭は、約百日間にもおよぶ祭事として有名である。

その古くからの伝統と由緒を裏付ける基礎的資料として、数多くの文化財が存在し、住民をあげて今日まで継承、未来に対して保存を必要とする文化財資料として、それぞれ国、県、町の指定文化財の指定をうけている。

今回、須成神社並びに須成文化財保護委員会の協力のもと、町指定文化財資料を中心に、県指定無形民俗文化財須成祭に関連する資料の提供をうけて、ここに特別展示を開催する次第である。

平成6年 1月 蠶江町歴史民俗資料館

○大字須成について

蠶江町大字須成地区は、町の北の端に位置し、蠶江川が集落の中央部を南北に流れ、現在戸数約800戸、人口3,000人を超えた町の主要な地域の一つである。

古く、川が運んだ砂が堆積し「沙成」「砂成」「洲成」と呼ばれたものが、後になって、現在の「須成」という地名になったと江戸時代の『地名考』『尾張志』には記されている。

この地に、人々が集落を築いた正確な時代は不明であるが、同区の富吉建速神社・八咫社（須成神社）と龍照院は、奈良時代に行基菩薩により建立されたと伝承され、平安時代末期から鎌倉時代初期（1180年代）には、木曾義仲に縁のあった社寺として有名である。特に龍照院の本尊木造十一面観音は、胎内の墨書名から、寿永元年（1182）に製作されたもので、当時には、すでに当地区には、大きな集落が形成されていたと推定されている。

以後、両社寺を中心に、江戸時代後期（180年代）には、定期市の六斎市が設けられ、門前町として繁栄した地区であった。

現在、富吉建速神社・八咫社の両本殿と龍照院の本造十一面観音立像は、国の重要文化財に指定され、それに付随する資料が町指定の文化財に指定されているように、古くからの文化財が数多く存在する地区である。

また、この地区で伝承されてきた「須成祭」は、織田信長、豊臣秀吉の時代から、今日までの約400年の長い伝統と由緒をもった祭で、特に8月第1土曜日と翌日の日曜日に執り行われる「宵祭」と「朝祭」は、県の無形民俗文化財に指定され、訪れた多くの人々を魅了する川祭として有名である。

蟹江の刺繻



蟹江町歴史民俗資料館

蟹江の刺繍の歴史

1 序

昭和初期、わが国での加工製品としての日本刺繍の生産は、国内向けでは京都が中心で東京や尾張南部地方がこれに次いでおり、外国向けでは横浜地方が一番で、神戸、尾張南部地方がこれに次いでいた。尾張南部地方（主に海部郡）は、わが国の刺繍の三大産地の一つであったのだ。

蟹江町の刺繍は明治の初期にはじまり、いろいろな経過を経て三大産地となるまで発展して、昭和11年の加工費の年額はおよそ28万円に達するほどであった。

このようにこの地方で刺繍が発展した理由としては、地理的原因と人為的原因があげられる。

地理的原因としては、次のようなことが考えられる。この地方は濃尾平野の天恵を受けるところが多く、近世まで副業の必要がなかったが、近世になり、文化が進歩して生活が向上するとだんだん副業が必要になってきた。しかし、この地方は水位が高いために尾張北部のように畑地を得ることは難しく、野菜や庭木などの栽培に進出することもできなかつたし、工場を得るには不便であったため、刺繍が副業としてもてはやされたといえる。

人為的原因としては、次の章で述べるように偶然の結果、その開拓者を得ることになった。